

「まなび歴史通信

第41号
2006.12.1

「町の木ブナ」に思う

大子町の「町の木」はブナである。ブナがこの町に適しており、また八溝山にはブナが古くから多くあり、今でもかなり古い木が残っている事から町の木に選ばれたのであろう。ブナにはホンブナ・イヌブナなどがあり、ホンブナはシロブナ、イヌブナはクロブナとも言われる。ブナを初め栗や櫻、欅、柏などのブナ科の仲間の栄養価の高い実は野生動物の大切な餌になる。またブナは保水性に優れ、水源涵養林としての重要な働きも期待できる。

先頃機会があつて秋田県の北部の山地を訪れた。有名な白

神山地の南側で一面新緑のブナの林だった。

五月末だというのにブナ林にはまだ雪が地表を覆つていた。新緑の林に雪という、この辺では見る事のできない珍しい光景であった。林の小道にはブナの実が一面に落ちていて、雪解けの湿った地面で既に白い根を出しているものもあつた。写真を見るように林はブナばかりで、外の木はほとんど見当たらない児童なブナ林である。

ここは一度国有林になりブナを伐採して針葉樹を植える計画があつたと言われるが、地元の人々が反対してブナ林を守

つたという話を聞いた。

大子町では

「ブナは町の木」とは言う

ものの、残念ながらそ

くは見られない。

八溝山も頂上付近は自

然林でかなりの大木が見られるが、これとてもブナ林

と言う程ではない。

できれば町中にブナの木

を増やしたい

ものだ。どこへ行つてもブナが見られるという町にしたい。

そうなれば「町の木はブナ」と宣伝しても恥ずかしくない町になるだろう。ブナの種は秋田県あたりへ行けばいくらでも手にはいると思われる。

秋田県や青森県のように広大なブナ林は無理だとしても、八溝山を中心にブナ林が広がり、町の至る所でブナの大木が見られるという町になれば、全国的にブナの町として有名になることが期待でき、素晴らしいことだと思う。

(石井)



歌声ひびく明るい町を目指して（六）

—大子混声合唱団の足跡—

大子混声合唱団のメンバーだけでなく町民にも参加してもいい、ともに音楽を楽しもうとの趣旨で始められ、合唱団恒例の行事として十回続いたのが「秋の音楽祭」であった。もう一つ、回数は少ないが、県内外の人びとを広く巻き込む形で行われた合唱団の注目すべき取り組みがあった。「よい歌を育てる運動」がそれである。

大子町宛に提出された昭和三十五年一月二十二日付の「昭和三十五年度大子混声合唱団助成金申請書」がある。そこに記された「行事計画」の六月の項には「よい歌を育てる運動」が予定されており、「俗悪官能的な流行歌を追放しよい歌を作るため町内県下各小中高一般から募集、団員が作曲」と説明されている。中心メンバーの一人であつた池田数和さんによると、「次第にコマーシャルソング流行の時代に入り、昔から歌わってきた童謡も尊重されなくなつた。何か今の子どもたちに残したい、この今までいいのか」との問題意識があつたようである。合唱団の全員でといふよりは、役員の間で話し合つて決まつたといふ。ちなみに、前記「申請書」には団員数四十名とあり、役員には団長の石島康男さんのほか小野瀬光昭さん（コンサートマスター）、川俣雄司さん（副コンサートマスター）、池田数和さん（実行委員）、望田重雄さん（同）、鈴木和枝さん（同）、磯みち代さん（同）、高橋浩さん（会計）、関正知さん（監事）、木村一夫さん（同）等の名が記されている。

歌詞を広い範囲から募集するためには、この企画が周知されなくてはならない。募集要項が作られ、新聞各社に送られた。

石島さんが勤務する新しいばらきタイムス社の「新しいばらき」新聞には、「よい歌を育てる運動 大子混声合唱団 歌詞を募集」との見出しで昭和三十五年九月二十四日付に掲載された。同記事によれば、締切りは十月十日、募集は小学生の部、中学生の部、高校・大学・一般の部の三部門で、部門ごとに入选作を一部編選び、入选作品を作曲して十一月の秋の音楽祭で発表（レコード化の予定）、という段取りであった。

応募作品の総数は不明だが、「第一次予選通過作品集」によると、審査対象は小学生の部二編、中学生の部六編、一般的の部五十編であった。募集期間が短いわりには反応はよかつたといえよう。審査は、「作者名を伏せて通し番号をつけ、各審査員が審査しその点数を集計し、最後に合評会を開いて入选作品と佳作を決定する」方法をとり、その審査には、詩人の大和ミエ子さん、音楽家の黒沢日出男さん、大子町長國谷順一郎さん、大子一高校長栗原武夫さん、「存在」同人の菊池国夫さん、大子町美術教会の白井博さん、合唱団の石島さん、川俣さんの八人が当たつた。このうち大和さんは宇都宮市、黒沢さんは常陸太田市の住民で、ともに川俣さんと親交がある関係で審査に加わった。とくに黒沢さんは、東京芸術大学作曲科教授で音楽教育・作曲教育で著名な池内友次郎教授の個人レッスンを受けて作曲理論を習得した経歴をもち、また常陸太田市内でクローバー音楽院主宰する立場でもあつたため大子町との間を行つたり来たり、川俣さんとは密な交流をもつていたという（黒沢氏談）。

応募数の関係からか、審査は二部門に分けて行われた。その結果、学生の部の入选作は高橋京子作詞「十五夜峠」、一般的の部は下田良一作詞「雨だれさん」と決まつた。高橋さん、下田さんとともに住所は不明である。他に、佳作が二編ずつ選ばれていた。前者には作曲家でもある黒沢さんが、後者には川俣さんが

雨だれさん 下田寅一作詞 川俣謙吉作曲

雨だれさん
アマテラソ ハピアニスト
雨の音で歌はなさい
工歌降り入るは
かへにタクト
振ります
下田寅一作詞
小説のなうに
踊ります

曲をつけ、十一月二十三日の第三回「秋の音楽祭」で披露された。入選者に招待状を出したが二人とも出席せず、後にレコードにして送ったという（石島氏談）。

第二回目の取り組みは早かつた。昭和三十六年五月一日には、「よい歌を育てる運動応募要領」を発送している。応募作品を集約する作業は九月末に行われた。「第一次予選通過作品集」によると、審査対象は小中学生の部十四編、高校・大学の部十五編、一般の部六十四編に上った。一回目よりも相当数の増加である。審査会は、十月十九日に開かれた。審査の方法は前回とほぼ同じ、審査員も栗原さんが中島武雄さん（大子中学校長）に変わつただけである。

審査の結果入選作に選ばれたのは、学生の部が神山ちあきさん（「四季の風」）、一般の部が白崎まさしさんの「お山の風つこ」である。神山さんは栃木県佐野市的小学校六年生、白崎さんは真壁町民であった。前回と同様、「四季の風」には黒沢さんが、また「お山の風つこ」には川俣さんが曲をつけたうえで、十一月二十三日の第四回「秋の音楽祭」で発表された。

「よい歌を育てる運動」はこの二回だけである。翌年、「第三回『よい歌を育てる運動』の歌詞募集応募要領」は作られたのだが、なぜか募集にまで至らなかつた。したがつて、第五回「秋の音楽祭」でも当然のことながら開連行事はなかつた。

この取り組みが二回で終了した事情は明らかでない。広く歌詞を募集し、応募作品を集約、審査し、入選作の二曲だけといえ作曲を依頼し発表するという一連の過程における様々な負担が、地方の小さな合唱団には重すぎたということであろうか。しかし、二回で終わつてしまつたとはいえこの試みは貴重である。地方からの文化発信を意味するこの果敢な試みが、昭和三十年代半ばに実現していくことに留意しておきたい。（齋藤）

雨だれさん
アマテラソ ハピアニスト
雨の音で歌はなさい
工歌降り入るは
かへにタクト
振ります
下田寅一作詞
小説のなうに
踊ります

樺太の終戦・緊急疎開・引き揚げ（その二）

昭和二十年八月九日早朝、武意加の国境警察隊がソ連軍の一方的襲撃を受け、中央国境地帯は勿論恵須取、鶴城、真岡

碑文

昭和二十年八月二十二日早
く霞う
る海は北西の風小雨霧視界

の西海岸、敷香、
白浦の東海岸、
豊真山道から
島都豈原へ陸

樺太府は、ソ連の参戦に伴い、老幼、婦女子の疎開を決定、この緊急疎開中、留萌沖で三船（小笠原丸、第二新興丸、秦東丸）が敵潜水艦により大破、または撃沈される大惨事が起つた。また、緊急疎開の為、豊原駅、落合駅等の広場に集合していた多数の老幼、婦女子が、空爆により死亡するといういたましい悲劇が

昭和二十年八月二十二日早

晩の海は北西の風小雨霧視界

を覆う

この日小笠原丸第二新興丸

碑文

昭和二十年八月二十二日早
く霞う
る海は北西の風小雨霧視界

を覆う

この日小笠原丸第二新興丸

碑文

隨所に起つた。

上部隊の侵入、空爆が全住民を恐怖のどん底に陥れた。

八月十五日を過ぎても戦火は熄まなかつた。

泰東丸の三船は戦乱の樺太より緊急疎開の老幼婦女子乗組員五千八十二名を乗せ留萌沖にかかりしが突如潜水艦の雷撃砲撃に遭い瞬時に沈没

或は大破し千七百八名の尊き生命を奪う。

残留日本人は、本土送還の成り行きに不安を抱き（音信不能）、緊急疎開で家族を本土に疎開させた方たちのなかにはその安否をきづかい、九月そろそろ寒さがきびしくなる頃、北海道に近い沿岸の

畢生の地樺太を脱し数刻夢に描きし故山を左舷にしてこの惨禍に遭う悲惨の極なり

荒波を乗り越え、必死の冒險脱出、心中如何ばかりか、成功を祈るのみ。然るにその大半は、ソ連の民警にとらえられたという。悲惨であつた。

星霜ここに十七周年我等同念す

このような混乱、不安が続く二

年十月中旬、日本人帰国の通達があり、十二月五日から十三日

昭和三十七年九月二十二日

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

小笠原丸

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

泰東丸

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

樺太引揚第二新興丸遭難者

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

泰東丸

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

樺太引揚第一新興丸遭難者

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

樺太引揚第一新興丸遭難者

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

泰東丸

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

樺太引揚第一新興丸遭難者

十一月十九日

このように混亂、不安が続く二

泰東丸

このように混亂、不安が続く二

村絵図に見る池田の溜池

溜池、B 鏡沢溜池、C 一ヶ沢溜池、D 山の田溜池、E 原田溜池、F 熊野沢溜池（二つ）が図示されている。

常陸國保内池田村の村絵図である。絵図に寶乗院という寺が十王平（現在の大子中辺り）に図示されているところから、天保年間（一八三〇～四四）以前のものと考えられる。寶乗院は真言宗の寺で、多賀郡友部法鷲院の末寺で小澤山千壽寺と号した。天保十四年以降になると、藩主徳川斉昭による寺院整理が行われ、寶乗院は廃寺になつてゐる。

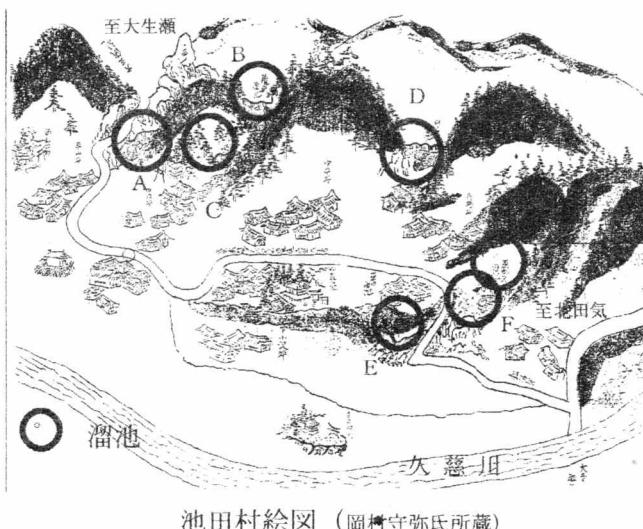
池田村は、久慈川の段丘上に位置し、水脈に不足しているので、水田開発をするには溜池が必要であった。絵図を見ると、山間に溜池が造られ、その水を灌漑用水として稲の栽培が行われていた。天保十三年の常陸國久慈郡池田村御検地帳（写）によると、

水田三十五町四反四畝十二歩、畠五十二町九反が耕作されていて、灌漑用の溜池は、谷の一方を堤でせき止めた谷池といわれ、水面面積の割には貯水量の多い溜池である。当時池田村には七つから八ヶ峰白井ヶ峰

茂衛門父子が常陸に來たその翌年の十八、十九年は干魃による凶作がひどく、農民は困窮に陥り、農民の中には身売りや逃亡まで起ころるしまつであつた。水戸藩では茂衛門、勘衛門父子を起用し、辰口堰をはじめ岩崎堰、小場堰の計画と施行にあらせた。収穫糧は増加し、干魃の困窮から農民を解放することができた。茂衛門父子の水利事業は、久慈川の江堰ばかりではなく、村々の用水、溜池まで及んでいた。

加藤寛齋の『御領内江堰溜池大江筋之發端記』に「岩崎、小場、高戸、小菅、赤沢、下手綱、山方、新地、上郷、栗野、谷田、川山、池田、成沢、小口、良子、星野宮、大菅、大中、折橋、山辺、下江戸、都合二十二ヶ村、江堰溜池水積、先祖茂衛門父子水積を以て用水場に罷成申候」とあり、勘衛門父子が谷田、川山、池田などを含め二十二ヶ村の江堰や溜池を造つたことが記されている。川山をはじめ谷田（天保十三年矢田と改称）の用水路、池田の溜池は、元禄年間（一六八八～一七〇四）頃に永田勘衛門円水父子の計画のもとに村の人馬を動員して開かれた溜池である。明治十九年頃の『池田村地誌料』に「一村水脈なし、溜池を十余ヶ所ニ設ケ以テ田ノ用水トナス」とある。水田耕作には灌漑用水は不可欠であり、生産増強のために灌漑用の溜池が造られてきたのである。

（小澤）



池田村絵図 (岡村守弥氏所蔵)

山 橋

(二)

大森政夫

四 橋の運用

山 橋

(二)

大森政夫

四 橋の運用

(一) 橋本体を積載地まで運ぶ

橋を山奥の積載地まで運ぶにはどうするか。

空橋を曳いて沢路を登る事は出来ない。そこで橋の中央部の横板の間に首を入れ両肩に載せて山道を登るのである。

そのため肩巾の間隔に合わせて一尺二寸にしたわけである。しかしこの橋巾は曳き手の肩巾によつて多少異なる事がある。また、橋の外にロープ、カスガイ（積んだ木材を固定するのに使う）大小一〇丁以上等を一緒に背負つて行くので、重量は三〇キロ以上になり重労働に慣れた人でもかなりきついといふ。

(二) 橋への木材の積載

山奥へ橋曳きに入る時は、一人では絶対に行かない。

積載時や走行中に危険を伴うからである。また仲間と一緒にければ互いに助け合つて難所を乗り越え、無事目的地まで搬出できるのである。

切り倒した木材（丸太）を橋に積み重ねる場合、橋の中央部二ヶ所に三尺五寸のカンザシを取り付けてあるので、橋本体の巾より多くの木材を積む事が出来る。

一度に積むことができる量は曳き手の個人差もあるが、たとえば裏小口直径一尺、長さ一二尺の木材（これを一本一石という）を六本、六石が通常の目安である。これより細い木材は本数が多くなるため四石くらいしか積めないという。

木材を橋に積載する場合、一段毎にロープをかけるが、一段目のロープはカンザシのアゴにかける。三段目まで積むとほぼ曳き手の胸の高さになる。走行中にロープがゆるむ事がないようにしつかり結ぶ。この時カジ棒になる一本の木材を曳く人の手の届く位置まで突き出しておく。このカジ棒とカジ棒に打ち付けたカスガイを使って橋をコントロールするのである。

(三) 橋の走行

橋路には事前にバン木と呼ぶ小丸太を路面に等間隔に並べておく。木材を積んだ橋がバン木の上に載ると木と木の摩擦によつて滑りやすくなる。

また橋が思い通りに滑らない時は、橋に常備しておく竹筒の抜きオイルをバン木の摩擦部分に塗ると滑りやすくなる。木材を積んだ橋を動かす時は、ただ力だけで曳くのではなく、カジ棒に打ち付けてあるカスガイを左手でつかみ橋を左右に揺するようにならがら、レンジャクで曳くのがコツだという。

(四) 下り坂での対応

橋路は殆どが下り勾配である。大小、緩急さまざまであるが、橋にはブレーキがないのでその対応は曳き手の経験と勘に頼るほかない。一つは人力で下る場合と、もう一つは坂で人力では支えきれない場合とがある。

前者はレンジャクを着けたままで下り、人力で支えきれないとつさの場合は、いち早くレンジャクを橋から外さないと危険なので、レンジャクの先の金具はこうした場合に備えて対応できるよう工夫されている。

後者の対応であるが、この場合はレンジャクを外し専らロ

一ロープ一本に頼る。

立木にロープを結び付け、このロープの先はカジ棒のカスガイの前頭部に巻き付ける。カスガイはロープの滑り止めで、カスガイの中にロープは通さない。

曳き手は下る櫂の前にいてカジ棒に巻き付けたロープを除くにゆるめながら下る。ワイヤーロープを使う時もあるがロープの性質上ロープは櫂の下を通すという。また櫂のハナ（前頭部の横板）に藤つるを輪にかけておきその中に棒を差し込み櫂の走りを制御する事もあるという。レンジヤクの金具が櫂から外れなかつたり、ブレーキ役のロープが切れると暴走した櫂の下敷きになり思わず惨事となる。櫂での事故はこれらに因る事がが多いという。

(五) 登り坂での対応

殆ど個々の人力で処理するか、仲間の手を借りるくらいで対応できた。そのため櫂路はあまり急な登り坂が出来ないよう工夫して作ってあるのだ。古くは人力による巻き上げ滑車を使った事もあつたという。

五 まとめ

櫂での木材搬出には、何組かの仲間が一緒になつて、お互いに助け合いながら難所を乗り切るのである。櫂による木材の搬出が行われていたのは昭和五十年頃までであった。その後は路なき路でも搬出が可能になつた動力運搬車が導入され、いつしか櫂は姿を消していった。鈴木さんが櫂引きの仕事をやめ製材工場に就職したのが昭和四十五年であつた。その頃を振り返っての話しによると、一日二往復山奥から目的地まで木材を搬出してくると賃金は

二千円ぐらいになつたといふ。

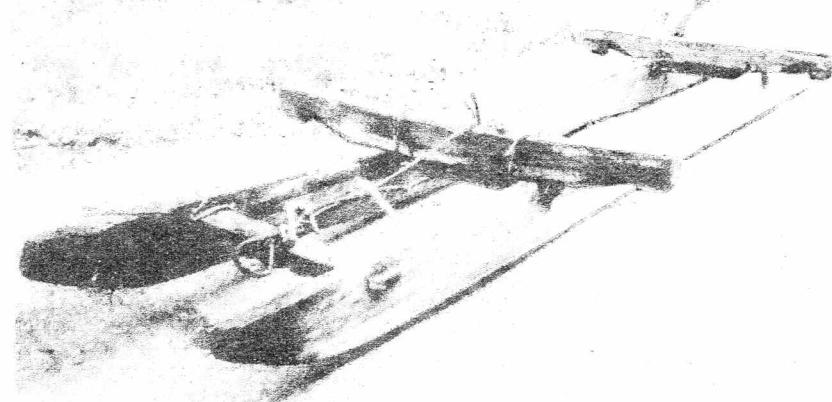
この賃金の算出基準は搬出した木材の石数に応じたもので、つまり一挙に多くの木材を搬出すればそれだけ賃金は多くなつた。しかし、

相当な危険を冒した仕事であるだけに欲張つて多く搬出ししようとすると者はいなかつた。事故のもとであり仲間の手を借りながらという敬遠もあつたので、誰もが自分の力量にあつた搬出量を堅持していった。

したがつて一日二千円の賃金はほぼ固定した日常賃金であつただろう。

ところが製材工場での一日の賃金は、いくら働いても日給八百円であった。

この双方の賃金の格差を見ても、櫂曳きは当時高級賃金であつたが、常時危険と背中合わせであつたとも言える。



国民文化祭やまぐち大会に参加して

国民文化祭をご存知ですか。昭和六十一年に東京都で開催されて以来毎年各県持ち回りで開き、今年で二十一回目を迎えてます。

この大会は、国体の文化版として、音楽、演劇、伝統文化、文芸、美術等の主催事業と、開催県の特色を生かした関連事業が開催され、各地の文化振興に寄与しています。

平成二十年には茨城県が開催地となりました。大子町においては、文芸祭「俳句大会」が開催されます。今年八月には大子町長を会長に、国民文化祭大子町実行委員会が設立され、また、九月には実践部隊としての企画委員会を設立しました。企画委員には地元の奥久慈俳句連盟会員、茨城県俳句団体役員等を委員に委嘱、委員長には茨城県俳句作家協会云長・金丸鐵蕉さんを選出、大会に向けての準備がスタートしました。

企画委員会最初の事業は、十一月十日・十一日に行われた国民文化祭やまぐち大会・文芸祭「俳句大会」の視察です。金丸委員長外三名が参加、会場地となつた山口市小郡町は、漂泊の俳人・種田山頭火の滞在した町として有名ですが、種田山頭火が五年間住んでいた「其中庵」を訪れてみると、雨上がりの静かな中、風の音を聞き、木の葉の揺れを眺める。山頭火の閉ざした時間がここではよみがえり、とても静かな時がながれているようでした。この施設は平成二年にふるさと創生資金で再建されたもので、施設の管理は、地域のボランティアが行い、早朝より清掃が行われていました。

俳句大会は、小郡ふれあいセンター大ホールで行われ、開会式の後は、

全国から事前投句された一般の部、一万一千句、小・中・高の部、一万七千句の中から、各部の入選作の発表、表彰、講評が行われました。とくに、小学生の作品には感性が溢っていて、驚かされる作品が多く、俳

句の五・七・五の短い文章が持つ魅力が再認されました。午後は、(社)俳人協会会長・鷹羽狩行先生による、『日本人の美意識』の講演、更に、当日投句された六百二十句の表彰、講評が行われ、最後に、次年度開催地の、徳島県東みよし町長の挨拶で終了しました。この大会開催に当たり山口市は、大会ボランティアを募集、多くの方が運営に携わり、それぞれの部署で親切な対応が行われ、大会を盛り上げてきました。大子町においても大いに参考になる事柄でした。

大子町では、従来から奥久慈俳句連盟が中心になって、流灯花火句会、氷瀑俳句大会が開催され、そして、俳句ポストの活用などの活発な活動が展開されていて、俳句の土壤はありますが、平成二十年に向けて「初心者俳句教室」等の開催により、地元の盛り上がりを図ることも大事になります。

今後、企画委員会では、俳句作りを通して自然に親しみ、生きる喜びと豊かな心を育てるためにも、多くの方々の参加ができる大会に向けて準備を進めてまいります。
(鈴木 徹)

編集人	斎藤 典生 (茨城大学人文学部)
野内 正美 (茨城県立大子清流高校)	
石井喜志夫 (元 教員)	
小澤 圭彦 (元 教員)	

鈴木 徹 (大子町生涯学習課)
遊 史 の 会

大子町立中央公民館歴史資料室気付
久慈郡大子町大字池田二六六九番地

〒319-3551 80295 (72) 2627